

獄中書簡集『罪と死と愛と』と対話する文学者

—金石範『祭司なき祭り』論—

林 相 珉

I 「事件の中途半端な似姿」と再話の現在性

『罪と死と愛と』（1963・5、三一書房）は、1958年の小松川事件で死刑にされた18歳の在日コリアン少年・李珍宇^{りちんう}の獄中書簡集である。小松川事件とは、小松川高校の定時制に通う李珍宇が同校の全日制女子高生を強姦殺害した事件で、逮捕後、本人の自白で同年4月にも賄い婦を強姦殺害したことが明らかになり、死刑が確定、戦後20人目の未成年死刑囚となった事件である。本人が犯行について「夢」みたいだったと語った故に「動機なき殺人」とも言われている。同事件をモデルにした小説・映画・ドラマは多々¹⁾あるが、在日コリアンによる創作は金石範が最初で最後である。

ところが、金石範の『祭司なき祭り』（「すばる」1981・1、同年6月に集英社から出版、以下、本文引用は『金石範作品集Ⅱ』所収、2005・10、平凡社）は今一つ評判がよくない。例えば、入江隆則は事件の「即物性が強すぎ」て、作中の「青年と読者との距離があまり縮まらない」（「文芸時評」、1981・2、327頁）と書いているし、立石伯も「いささか事件に束縛されすぎ」て『鴉の死』のような衝撃性がない」（「群像」1981・9、287頁）と指摘している。さらに、「無実説」の立場に立つ野崎六助は「想像力」も「事件資料」を読む力も「独創的なものは何もない」「現実の事件の中途半端な似姿」（『李珍宇ノオト』1994・4、三一書房、145頁）だと手厳しく批判している。これらは『祭司なき祭り』を原話と再話の関係から捉えている。この前提の中では、小松川事件は不動の起源であり、小説は常にその複製でしかない。そして、この眺め方が焦点化するのには、原話と再話に共通する普遍性である。しかし、普遍性を焦点化

する眺め方からは次の「ほとほと困惑」は説明できない。

この小説の中に、貧困朝鮮人家庭の問題に積極的に取り組む日本人の女性民生委員が出てくる。もちろん善意の人間である。しかし主人公は、「彼女がかわいそうで気の毒な朝鮮人に同情を寄せれば寄せるほどに」、自分が「あらゆる醜悪なるもの、汚れたるもの、貧しきもの、弱きもの、呪われたもののかたまり」に感じられてしまう。この女性同様戦前の朝鮮で生活したことのあるほくなどは、こうした微妙な事態にはほとほと困惑するしかない。(「81 文芸時評 (二)」、「文芸」1981・2、26 頁、傍点は論者)

川村二郎が「ほとほと困惑」する理由は、「善意の人間」が主人公を苦しめ、故に主人公から「憎悪」され「拒絶」されるからである。この「微妙な事態」は、「善意」からなる関係の地殻変動に起因しているものであるが、このような同時代の「微妙な事態」の現在性に原話と再話の眺め方では説明がつかないのである。

そもそも金石範は「事件の中途半端な似姿」を伝えるために『祭司なき祭り』を書いたのだろうか。そうではあるまい。「事件の中途半端な似姿」だけなら、すでに「ライフル銃事件に思う」(「京都新聞」1968・2・26)や「私にとってのことば」(「早稲田文学」1973・3)などで、日本の「抑圧的な社会構造」が生み出した事件として小松川事件と1968年の金嬉老^{きんきろ}事件を書いている。問題は、それならばなぜ、金石範は金嬉老ではなく李珍宇を書いたのかである。金石範は小説と同じタイトルのエッセイ「祭司なき祭り」(「すばる」1980・4)のなかで、読者の葉書がキッカケで見たギリシャのゲリラ敗北を描いた映画「旅芸人の記録」の「基本的な構造」について、「この映画がわれわれに突きつけてくるのはその同時代史的意義であって、作品の時代的背景である1940年代を前後したギリシャの歴史ではない」と書いている。すなわち、この映画の構造は「記録性を借りて前面に押し出された歴史とクロスする方法」で「同時代史的意義」を問うものだと解釈している。「小説書きである私に大きな刺激を与えてくれた」

と語る金石範が、「事件の中途半端な似姿」＝「記録性」に無自覚だったとは考えにくい。それならば、問うべきは、「中途半端な似姿」を「借りて」しか表現出来なかった「同時代的意義」＝再話の現在性に他ならない。

そしてもう一つ現在性への興味を引くのは、「すばる」掲載1ヵ月前の1980年12月7日には、韓国でも小松川事件をドラマ化した『なぜ』が放送され「80%」という高視聴率をマークしていることである。さらに「すばる」掲載中の1月10日には日本のTBSから「韓国の反日テレビドラマ“小松川事件”」という「報道特集」が放送されている。

本稿の目的は変更された作中小説「ある時」に注目し、その変更の意味が同時代の「第三の道」論争と交錯していく模様を描き出し、獄中書簡集と対話する『祭司なき祭り』の現在性を明らかにすることである。

Ⅱ 「悪い奴」から作中小説「ある時」へ

金達寿は、小松川事件は「文学」だ（『小松川事件の内と外』補遺、「新日本文学」1961・10）と書いている。なぜなら裁判所の文法では「はっきり」と解けない多くの問題を内包しているからである。たとえば、「姦淫」の有無をめぐる検察と弁護士側の対立もその一つであるが、もう一つは在日の未成年が第1回目の犯行後に書いた小説の解釈にも見られる。李珍宇の「悪い奴」（『李珍宇全書簡集』1979・2、新人物往来社、48頁）は読売新聞懸賞に応募した作品で、第1回目の犯行と2回目の犯行の間に書かれたものである。しかし『祭司なき祭り』の作中小説「ある時」は、第1回目の犯行から逮捕までを描いているし、応募も完成もしていない。この変更は、何を意味するのか。

「悪い奴」のあらすじは、昼は会社、夜は定時制の高校に通っている主人公（「朝鮮人」という設定ではない）が、突然、会社から解雇を言い渡される。理由は中学時代にクラス費を盗んだ事実が会社に密告されたからである。密告したのはかつて同級生だった山田である。主人公はまたも続く密告を恐れ、トウモロコシ畑で待ち伏せ、山田の首を絞めて殺す。そして犯行は完全犯罪に終わ

る、という話である。「悪い奴」に関する裁判所の見解は以下の通りである。

本件第二の犯行後は、自ら完全犯罪なりと誤信して、興味本位に、嘲笑的態度を以て、新聞社に五回まで電話し、被害者宅や捜査課長宛に太田芳江の遺品の一部を郵送したり、又第一犯行当時の情景を想起して「悪い奴」という小説を書いている等から見て、良心の呵責や一片の悔悟の形跡すら認め難い。（『小松川事件』検察官送致決定書、「家庭裁判月報」1958・10、引用は『李珍宇全書簡集』前同、81頁、傍点は論者）

「精神病的異常者」であるならば、「第一犯行当時の情景を想起して『悪い奴』という小説」など書けるはずがない、というのが裁判所の判断である。この判決に弁護士側は「悪い奴」にみられる「社会秩序に対する反感」は、「朝鮮人」からくる民族差別の「下でつくられ、しかもこれが本件犯行の動機を為しているものである」（「控訴趣意要旨」、『李珍宇全書簡集』前同、89頁）と反論する。しかし、弁護士側の控訴は棄却され、李珍宇は少年法が適用されず死刑を宣告されるのである。ここで注目すべきは、「悪い奴」をめぐる検察側と弁護士側の解釈は対立しているものの、第1回目の犯行と「悪い奴」に因果関係を認め、小説の主人公を「朝鮮人」である李珍宇と想定し解釈していることは同じであるということだ。これは裁判に限らず、大下英治も「悪い奴」の主人公を「李の分身」と捉え、「李は小説を書き上げ、読売新聞に送りながら、ひそかに愉悦を味わっていたのではあるまいか」（「小松川女高中生殺しと李珍宇」、「現代の眼」1978・8、100頁）と解釈しているし、獄中書簡集の編者・朴壽南も「悪い奴」の主人公を「〈チョーセン〉と重ねて読む」ことで、そこから「朝鮮人」という「境遇」による「存在を奪われ魂を裂かれた少年」＝李珍宇を読み取っている（「解説—小松川事件」、『李珍宇全書簡集』55頁）。評価は違うものの、評価まで持っていく手順は全く同じである。そこで金石範は、作中小説「ある時」のエピグラフに次の一行を持ってくる。

「悪魔は神の怠惰に対する唯一の挑戦者である」(201頁)

上のエピソードは、李珍宇「悪い奴」のなかで、主人公の盗みを密告した後の山田を描写した1行、「弱者に対する強者の心持ちを味わっている」(『李珍宇全書簡集』52頁)に対応したものである。「弱者」の主人公を「悪魔」に、「強者」の山田を「神」に置き換えている図式である。さらに「悪魔」を「朝鮮」に、「神」を「日本」に置き換えると裁判における「悪い奴」の解釈と全く同じである。「事件の中途半端な似姿」とも読める。しかし注目すべきは、小説のラストシーンで主人公の金朋男きんともおは上のエピソードを「万年筆で線を何重にも引いて消」(301頁)するのである。金朋男は作中小説「ある時」について「どうしても、強姦殺人を現実に実現してから、その想像世界における報告書として小説を書きたかった」(243頁)と語っている。しかし、小説の最後では、その「報告書」を規律しているエピソードを「万年筆で線を何重にも引いて消」するのである。この否定は何を意味するのか。結論を先に言うと、この小説は「悪魔」と「神」が内包している関係性を切断する物語、そういう関係性を切断する意味を問う物語である。

「ある時」のあらすじは、「一人の貧しい青年」が「とある街角」で「夜の女」と「遣り取り」をする。その後、突然、女の「首を絞めて殺」す。ところが殺したはずの女が、忽ち「眼のまえから」「すうっと無くなってしま」う。それ故に、青年は「自分自身の行為が夢であって、いや、行為だけではなく、自分の存在」(215頁)までが「夢」としてしか感覚されない。その後、青年は「夢」を切断し自己を「証明」するために繰り返し女を殺す。「ある時」の主人公が「自身の行為」や「自分の存在」を「夢」としてしか感覚されない描写は、金朋男が第1回目の犯行を「夢」みたいと語る場面と対応している。しかし注意しているのは、李珍宇の第1回目の犯行と2回目の犯行には必然性がない。偶然だったのである。ところが小説ではこの偶然に自己「証明」という意味を与えている。いわゆる「動機なき殺人」に自己「証明」という動機を付しているのだ

る。それならば、作中小説「ある時」を「おれの思想なんだ」(294頁)と語る金朋男は、いかなる「証明」をしたいがために犯行を繰り返すのか。そして、その「証明」の結末をなぜ否定するのか。

Ⅲ 「第三の道」論争

「洗濯泡みたいにぶつぶつ浮き上」がるいくつもの名前を持っている金朋男は、「日本人に嫌われるいやなおいがしみついている」『金^{きん}』の字』を一番嫌っている。しかし、金朋男が「チョーセンジン」としての主体性を持っているかと言えば、そうでもない。「キム・ボンナム」と本名で呼ばれると「しばらくきよとん」(170頁)としてしまう。このような金朋男の主体は、同時代に起きていた「第三の道」論争に見られる在日「二、三世」の感覚と連動したのものである。1970年後半には在日の生き方を分析した日本人による二つの論文が波紋を起こしているが、その一つが坂中英徳「今後の出入国管理行政のあり方」(「外国人登録」1977、221号)で、もう一つが飯沼二郎「在日朝鮮人の『第三の道』」(「朝鮮人」1979・8)である。

坂中英徳は在日の生き方を「(一) 帰国志向、(二) 帰化志向、(三) 韓国・朝鮮籍のまま日本に定住志向」に分類し、「(三)」のタイプは日本社会にマイナスであるから帰化しやすい環境を作っていくことが重要であると書いている。これに対して飯沼二郎は、坂中英徳がマイナスと危惧した「(三)」のタイプこそ正当に評価されるべき「第三の道」であると反論したのである。しかし、二人の対立は、ぱくいる(=朴一)が後から解説しているように「基本的に帰国思想を否定するもの」である故、「精神的に祖国と一体化した在日一世の批判を浴びることになる」(『在日論』論争の成果と課題—在日朝鮮人二・三世の生き方をめぐって、「ほるもん文化」1992・10、94頁)。そこで「在日一世」に属する金石範は、同時代の「80%」を占めつつある在日「二、三世」に次のような覚醒を促す。

「在日」の位置は自立的でなければならない。(中略)ところで、かりに差別・被差別の図式に立った場合の、告発する側のつまり差別されている側の意識の状態はどうか。被差別のほうは一般の人が持ち得ないような苦しみを伴った緊張と同時に、自分が立っている相手を告発できる位置に甘んじやすい故に、つまり皮肉にも被差別であるが故に陥りやすい落とし穴を自分で持っているのである。(中略)つまり加害・被害の図式が“同情”でバランスが保たれているような状態では双方とも救われようがない。(『「在日」の思想』、『「在日」の思想』1981・12、筑摩書房、『新編「在日」の思想』所収、2001・5、講談社文芸文庫、14頁、傍点は論者)

「二、三世」の相反する感情を持つ金朋男は、「チョーセンジン」と「ニッポンジン」を隔てている「トリデ」の越境を図る。「日本人」への復讐＝「告発」である。この越境はまさに作中小説「ある時」で、自己「証明」のために「神の怠惰」に「挑戦」する「悪魔」の位相と同じである。しかし不幸にも、金朋男が「告発」に用いる論法は、「差別・被差別の図式」である。そして、このような「告発」の結末には、次のような「いやな夢を見る」ように仕掛けられている。「夢のなかの彼は自作の小説がついに現実と合体した感覚に戦慄しながら、死んだ女子高校生の腹の上に馬乗りになって、力づくで首を絞め続ける。(中略)ところが絞め続けながら苦しむ彼女の顔を見ると、それは女子高校生ではなく、幼い少女、いや、幼い妹の純子だった」(301～302頁)と結ぶ。「差別・被差別の図式」を告発する物語は、自分の妹を犠牲にして終わる。それも告発する側の手による死である。

初版『罪と死と愛と』が出版された時、編者の朴壽南は大江健三郎との対談のなかで「小松川事件というのは、ひとことでいえば朝鮮人としての民族意識を破壊するような環境の中で育った少年の悲劇」(『新しい朝鮮の正統の世代』、『毎日グラフ』1963・6・30、43頁)だと語っている。さらに、在日「二、三世」が「80%」を占めつつある世代交替期に出版された改訂版でも、編者の朴壽南

は小松川事件を「半日本人の負の典型」と位置づけ、「わたしたちのこの存在の危機を自覚する証言として、『小松川事件』は、むしろ、今日、普遍的課題として問い直されるべき原点」（「あとがき」、『李珍宇全書簡集』前同、460頁）であると書いている。初版『罪と死と愛と』や改訂版が語られる文脈は全く同じである。「半日本人の負の典型」である小松川事件は、「民族意識」の欠如から来るものとして語られる。しかし「自分の内部には“朝鮮”がない」（225頁）と語る金朋男＝在日「二、三世」に「普遍的」な「民族意識」はありうるだろうか。

そこで、金石範は「在日朝鮮人に対する視点の転換」がまず必要だと説く。なぜなら「絶対多数を占める」「二、三世」に「一世的な心情から出てくる腰掛け的な視点」＝一世の「民族意識」を「当嵌めるべきものではない」（「在日」の思想）前同、29頁）と考えるからだ。そして、まず、「差別・被差別の図式」に依拠した「告発」は止めよう、そういう形の「告発」は「差別されている者」、すなわち在日の方から「打破」しよう、と語っている。在日の「自立」に、「善意」からなる「差別・被差別の図式」を取り払う金石範の姿勢は、李珍宇の次の文章と通底していることが分かる。

私の問題には二つの見方があり、一つは境遇はいかにして私に罪を犯させたか、ということであり、もう一つは、私は境遇においていかにつとめたか、ということです。この後者から責任の問題が出てくるわけです。（中略）私は決して、私のためにつくしてくれている人々の善意を無視しているわけではありません。（中略）けれどもこの問題はそのようなものとして見られるべきものではないのです。（「十二月二十八日 李珍宇より池田淳子へ」、『李珍宇全書簡集』前同、348～349頁）

金嬉老は、自分の犯行について「民族差別問題というものは良いことなのか、悪いことなのか」（『われ生きたり』1999・12、新潮社、126頁）という設問を儲

け、そこから犯行の根っこを解剖していこうとする。金嬉老は犯行の動機を環境という外的原因論から説明しようとしている。しかし、李珍宇は、自分の問題を「在日朝鮮人」という環境から考えようとする「人々の善意」には一定の距離をとる。そして外的原因論ではなく、「私は境遇においていかにつとめたか」を考えるべきで、そこから初めて「責任」という問題が出てくると書いている。冒頭で川村二郎は、「日本人の女性民生委員」の「善意」を「憎悪」し「拒絶」する金朋男には「ほとんど困惑」したと書いている。しかし、それもそのはず、この小説はその「善意」＝「同情」からなる関係を切断する物語である。「善意」を「差別・被差別の関係」の所産と考える金石範は、この「善意」は「自分で自分の足を打ち落としてしまう斧」（「在日」の思想 前同、59頁）に化けやすいと言う。川村二郎と同じく朝鮮で育った田中明はこのような転倒を「日本（人）—朝鮮（人）の『関係』」が生産する「二人三脚」（「在日朝鮮文化人への疑問」、「季刊 三千里」1975・春、149頁）だと書いている。二人に見えて、一人、四本の足に見えて、三本、このような関係からは「責任」の所在がうやむやにされるということである。そういう意味で小説のラストシーンで「神の怠惰」に「挑戦」する「悪魔」を「神の子分」＝「二人三脚」に捉え直して、「挑戦」の帰結を自分の手による「妹」の死に設定したことは象徴的である。要するに、「差別・被差別の図式」では「悪魔」＝「朝鮮人」の主体性は確立できないということである。

最後に、韓国のKBSで放送されたテレビドラマ『なぜ』を見ておきたい。物語は「成績がずば抜けて優秀」な「在日韓国人」高校生が、会社で朝鮮人であることを隠していたことで「リンチを受ける」。そしてそれが噂され、恋人の女生徒から「朝鮮人は汚い」とののしられる。そのショックは「怒りに変わり」、青年は「化物」になって女を絞め殺すのである。ここに描かれている「日本人」と「在日韓国人」の関係は、言うまでもなく「差別・被差別の図式」である。しかし面白いのは、獄中で「民族にとって名前」や「言葉」とは何かが問いかけられる場面で「報道特集」はカットされ、「1時間40分」のドラマは「18分程

度」に短くまとめられる。韓国の『なぜ』やそれを取り上げるTBSの「報道特集」・「韓国の反日テレビドラマ“小松川事件”」というタイトルや編集のあり方からも分かるように、小松川事件を語る文脈は「差別・被差別の図式」に依拠している。

事件から23年、金石範は「80%」を占める在日「二、三世」を目の前に「差別・被差別の図式」の「陥りやすい落とし穴」を最も警戒しそのような関係を切断しようとした。世代交替とともに変わりつつある「二、三世」の「内面」＝「民族意識」に「一世的な心情」を強要するのではなく、李珍宇が語る「私は境遇においていかにつとめたか」を正面から受け止める「責任」ある「自立的」な関係を提示しなかったのである。

〔注1〕モデル小説・映画・テレビドラマ及び関連年譜

- 1958年4月20日 第1回目の犯行
1958年8月17日 第2回目の犯行
1958年9月1日 逮捕
1959年11月 深沢七郎「絢爛の椅子」（「婦人公論」）
1961年3月 木下順二『口笛が冬の空に…』（NHK TV、「テレビドラマ」1961・5）
1962年4月 白坂依志夫「他人の血」（「シナリオ」）
1962年5月 三好徹『海の沈黙』（三一書房）
1962年11月 大江健三郎「叫び声」（「群像」）
1962年11月16日 絞首刑
1963年5月 朴壽南編『罪と死と愛と』（三一書房）
1968年2月3日 大島渚「絞死刑」（創造社）
1970年10月 深尾道典「いつでもないつかどこでもないどこか」（『曠野の歌—深尾道典作品集』大光社）
1979年2月 朴壽南編『李珍宇全書簡集』（新人物往来社）
1980年12月7日 韓国テレビドラマ『なぜ』（KBS＝韓国放送公社）
1981年1月 金石範『祭司なき祭り』（「すばる」、同年6月に集英社から出版、『金石範作品集Ⅱ』所収、2005・10、平凡社）
1981年1月10日 報道特集「韓国の反日テレビドラマ“小松川事件”」（TBS）

* 討議要旨

石川巧氏は、主人公がエビグラフを抹消する行為を「関係性を切断する」ものとして捉えているが、むしろ抹消した痕跡によって、その箇所が重い意味をもって浮かび上がってくる可能性も考えられるのではないか、と提案した。

小林実氏は、TBSの編集方法が「差別・被差別の図式」を浮上させたという点について、80年代初めの韓国国内には、日韓関係や在日問題について同様の図式で捉えようとする意識が存在していたのか、と質問した。